にいがた

北から南から

「私たちが来るとうれしそうな顔をしてくれたことがうれしかったです」「学校をさぼりがちであまり授業に出れませんでしたが、政経はとても楽しく授業を受けれました」「先生には迷惑をかけてしまったけど、いつでも優しく接してくださってありがとうございました」「（授業に）いないときもたまにあったり、たくさん迷惑をかけたかもしれませんが、廊下で会うといつも元気にあいさつしてくれたり、とてもうれしかったです」などと授業の感想に書いてくれた〝サボりがちな〟彼らからのメッセージは、また私の大事な宝物になりました。

（にし　のぶゆき）

お寺のこと二題

内山雄平

どう読む「般若心経」

私は、高校教員退職後、菩提寺の護持会長に推され心ならずも引き受けることになった。それまで、仏教についての知識は殆どなく、高校時代に教わった空海、鎌倉時代の親鸞・道元などの著書名程度しか記憶になかった。だから、仏教の世界は何も知らぬまま護持会の仕事に携わることになる。ましてや、宗務所など何を業務としているところか分からなかった。

お寺の属する第18教区の春秋の総会時には、本尊上供として必ず般若心経を音読する。教本を手にとって目で追いながら声をあげるが、その意味たるや全く分からぬまま時を費やし

ていた。そこでどのような内容を意味するのかを知りたいと、ベストセラーにもなった瀬戸内寂聴『寂聴般若心経』（中央公論社、１９８８年）を手にした。分かりやすく、所々笑いを誘う解説ではあったが、２回ほど読み直してもいまいち腑に落ちなかった。ある坊さんに般若心経は一言で言えば、どのような内容かと尋ねると、「空」の世界を意味しているのだという。中には分からないから尊いのだという人もいた。

私の友人で、長岡市蓮花寺にある法華寺の田辺堯正さんにも教えを請うた。由緒ある真言宗（豊山派）微妙山奥之院の第六十一世住職で東大法学部出である。彼は改訂新版『牧師が読む般若心経』（橋本左内著、白石書店、１９９６年）から必要と思われる資料をコピーして送ってくれた。

著者の橋本左内は、宮坂宥洪師の分類基準をもとにおびただしい『般若心経』著作群を、無意識の領域（オカルト的なもの）、自己形成の領域（人生論風なもの）、無我を知る領域（宗学的教義的なもをの）、空を観る領域（総合的で仏教本来のもの）、人知を超えた領域（菩薩道に生きるもの）とに分け、その内容と特色を上げている。この中で、著作数の最も多い「人生論風のもの」の代表的な例を『般若心経の読み方』（ひろさちや著、日本実業出版社１９８２年）から引用し次のように紹介している。

チェコスロバキア製の１万円もするコップに小便をし、一夜明けこの小水を捨て、これを綺麗に洗う、それでビールを飲めるか、いくら綺麗に洗っても小便の入ったコップは汚いと感じる、それが人間だ。何も知らぬ人間なら平気でそのビールを飲む。本当はコップそのものは汚くない、洗えば綺麗な筈である。その綺麗なコップを汚くしているのは人間の心なのだ。「綺麗」「汚い」を超越しているただのコップを心の働きによって時には「綺麗」にし、時には「汚く」する。すべては心の働きによってつくられたものなのだ。それが仏教の教えであり、「空」の哲学に他ならない。

にいがた
北から南から

このコップの話に橋本は問うている。

日本帝国主義が東南アジアを侵略し、そこに住む人々（コップ）を壊し、壊さないまでもコップの外側も内側も汚してしまった。従軍慰安婦にされた女性たちは、その身体を陵辱され、一生を犠牲にされ、心に癒やしがたい傷をつけられた。人生論者は、これも心の持ち方で解決できるというのだろうか。このような深刻な、心の持ち方ではどうにもならない現実のど真ん中で、どうするかが問われているのである、と。このことは、新型コロナウイルスの対処にはこころでは済まない現実がパンデミックにも私には見てとれる。

そして、百出する「般若心経」解説書の殆どは心の持ち方と解釈に終始しているとし、先の「寂聴般若心経」も常識の範囲内であり、人生論風を超えるものはない。

これまでの「般若心経」についての本は人生と世界を解釈することに終始してきた。しかし、大切なのは人生と社会を変革することである。これを明らかにした解説書が林田茂雄著『般若心経の再発見』（雪華社、１９８２年）であるとした。さらに橋本は、仏教はあの世に往く教えではなくこの世に生き抜く教えだったのではないかと説く。

結論を言えば、般若心経の最後の「偈」を次のように読む橋本の解読に、私は「心経」の意味するところに確信を持った。希望も見えて来る。

［原語］　　［訳］

ガテー　　俗の世を出て行けよ
ガテー　　自分から出て行けよ
パーラガテー　　悟りの家から出て行って
パーラサムガテー　　巷に苦しむ民の所に行けよ
ボディー・スヴァッハー　　そこで菩薩業を実践しようよ
バンニャシン　　そこで真の智慧の幸せがあるのだから

晋山・結制を終えて

この（２０１９年）10月19～20日、菩提寺・東膳寺の住職渡辺弘行さんの晋山・結制を無

事、終えることができた。

いつだったか檀家の総会時に、何とか緋の衣を着たお坊さんに是非見送ってもらいたいとの強い要望が出され、小さなお寺でそれが可能なのかどうか、ある年輩の住職さんを尋ね問うた。それは、1千万円～3千万円もの高額な費用を要するといわれるからである。

わが寺に見合う規模で行うには、参列するお坊さんの人数をなるべく少なくすること、費用を少なくする手立てを講ずることだと教えてくれた。そこで3ヶ年かけて檀家の皆さんに寄進を仰いだ結果、目標とする額を超えることができ、檀家の皆さんの要望に応え、遠慮しがちな住職弘行さんの気持ちを叶えることができた。

常日頃、私はお寺に対して強い懸念と強い期待を抱いている。最近の若い人は、我々の世代と違って、「おれ、お寺と関係ないよ」と素っ気ない。一例を上げると、NHKの番組で瀬戸内寂聴さんが、松本サリン事件の首謀者麻原彰晃に心酔した医学生（長野県出身）に、「そんなに人生に悩みがあったら、長野にはお寺が沢山あるのになぜ相談しなかったか」との問いに、彼は「お寺は私にとって風景の一つだ」と応えたのである。

一方で、悩みに悩んで自殺寸前の青年が、相談に乗って欲しいとお寺を尋ねた。ところが住職の前で何時間も座ったまま、何も語らず最後に「ありがとう」と言って寺を後にしたという。

このような異なるお寺の有り様に、気持ちを込めて次のような祝辞を弘行さんに贈ることにした。

晴れて新命住職となられた弘行さん、本当におめでとうございます。東膳寺檀家を代表して祝辞を述べさせていただきます。

新発田宝光寺ご住職寺崎敬道様をお迎えし、晋山開堂において、本堂を広く開放し皆さんの信仰、修養の道場とする旨を宣言し、お寺を地域にそして人に開くとの誓いを立てられました。

去る8日早朝、NHK岐阜放送局の若い女

にいがた
北から南から

性アナウンサーが横山泰賢さんに、インタビューしていました。横山さんは曹洞宗、大本山永平寺国際参禅部長で岐阜にお寺がある方のようです。

「平和を願って多くの人が坐禅をすれば、平和が来るでしょうか」との問いに「直球で、きましたね、禅を組むときは、平和のためとかにこだわって、坐っては禅にならない、無念無想の境地が理想です、なかなか辿りつけませんがね」と。横山さんは「禅を組むによい姿勢・呼吸法を教えてサポートは出来ます。それまでです、あとはその人の自主に任されます。そして、自分自身が心穏やかに平和に生きてゆくにはどう自分と向き合うか、どう、すべてのことに向き合っていかなければいけないか、そこだと思います」、といわれていました。

これを聞いて、８００年前の道元様が只管打坐（しかんたざ）（ひたすら坐禅をすること）とおっしゃったことは、それは「自己と向き合われよ」と諭されたのだと分かりました。坐禅は自己を見つめ、自己の生き方を見いだす行い、と私なりにとらえたのです。お寺は自分とどう向き合い、己の生き方を見いだす、そのよりどころとしての、場であって欲しいと願っています。

今回の未曾有の大災害をもたらした台風第19号の惨状を見れば、明日どころか今夜の命さえ分からない今日です。こうした世であればこそ、法事やお彼岸などの年中行事だけでなく個人的なお話も気さくにできるお坊さんになって頂きたいのです。どうか檀家の方々の心のオアシスになって下さい、お寺を楽園のようなところにしてください。

最高の僧位を授かった弘行さんなら、こうした願いを叶えて下さるものと信じております。そのため檀家一同力を尽くすことを誓い、祝辞といたします。

２０１９（令和元）年10月20日

檀家代表　内山雄平

この稿は、新潟県曹洞宗第18教区機関誌「輪」に掲載したものをもとに加筆した。

（うちやま　ゆうへい・所員）